

夢に作りたンス

はばたく

平成人

□ 3 ■

家具製作会社勤務

杉戸正輝さん(17)

(甚目寺町)

住宅地の一角にある作業場、自動かん皿のそばに立つ。向こう側から先輩が通す合板を受け取る。たんに使う板を削り、厚さをそろえる作業だ。

知的障害がある。春日台職業訓練所(春日井市)の木工科を修了し、昨年4月、江南市の家具製作会社に就職した。会社では一番の若手。一人で任せてもらえる仕事はまだないが、昨年の「第7回国際アビリンピック」の「家具製作(基礎)」部門で金賞を受賞。周りの見る目が変わった。

作業台の下にもぐり、泣きながら床をたたく。「帰りません」。「大会で結果を残すことで、『自分ができる』と

アビリンピック金賞が励み

「小さくても一人で」

アビリンピック出場が決まり、昨年5月に競技の課題が発表された。仕事が休みの日には、かつて寮にいた春日井市の同職業訓練所まで行き、練習を重ねてきた。電車とバスを乗り継いで約1時間半かかった。

大会を控えた10月。休みの

ない生活で、集中力が切れ、同じ失敗を繰り返した。「やる気がないなら帰れ」。指導の白尾健一郎先生(41)が声を荒らげた。

いうことをみんなに知らせた。練習で作った課題の箱は20個以上になった。

大会当日、後輩42人がバスで応援に駆け付けてくれた。大勢の人が見つめる中、5時間課題の長さ30センチ、幅250ミリ、高さ90ミリの本箱を作成し、精度を競う。緊張し、結果は金賞。メダルを手

手が震えたが、使い慣れた道具を握ると止まった。木材を寸法通りに削り、表面にかななをかけて仕上げる。ちょっとしたミスも許されない。時間制限内で思い通りの作品が完成した。会心の出来だった。

国際アビリンピック 4年に1度、障害者が職業技能を競う国際大会。昨年11月に静岡市で開催された第7回大会には34の国と地域から約910人が参加。婦人服の洋服など30種目で技能を競った。日本は12種目で金賞を獲得した。原則22歳以下の若者が技能レベルを競う「技能五輪国際大会」も同時期に静岡県沼津市で開催された。



真刻な表情で作業をする杉戸さん(高橋美帆撮影)

殊支援学級の担任に電話で報告した。昼食を「ちそう」になり、「よかったなあ」と声をかけてもらった。ほめてもらったのが誇らしかった。社会人生活では、障害者だから許されるという甘えを禁じている。機械や手順はなかなか頭に入らないので、必ずメモを取る。作業用のポケットに手帳を持ち歩く。社内の人の名前、機械や部品は絵付き。手帳は3冊目になった。

今後の目標は「小さくても、たんすを一人で作れるようになること」。はにかみながら答える後ろで、「がんばりや。筋がいいし、一つ一つ覚えていけば